

歴史叙述における虚構性・叙述性・  
客観性の三要因の研究

三宅正樹

歴史叙述における虚構性・叙述性・客観性の三要因をめぐる研究は、アメリカの歴史学者ヘイドン・ホワイトの名著『メタヒストリー：一九世紀ヨーロッパにおける歴史的イマジネーション』（1973年）の刊行によって新しい段階に入ったと見る事が出来る。ここに展開された一九世紀ヨーロッパの史学史、史学思想史への鋭い批判は、歴史学の客観性への安易な確信に対するきびしい挑戦と受けとめて誤りではないであろう。本研究では、まず第一に、ランケに始まる一九世紀及び二〇世紀のドイツ史学史、史学思想史を対象として、そこでの代表的な歴史学者、さらには歴史哲学者において、これらの三要因がどのような関連において示されているかを明らかにすることをめざす。これが、本研究の第一の課題である。

ここでは特に、ドイツの歴史学の動向と密接な関連をもちながら展開された、いわゆる西南学派の新カント派の歴史哲学における歴史認識論に注目したい。この学派を代表するヴィルヘルム・ヴィンデルバントは、一八九四年のシュトラスブルク大学学長就任講演「歴史と自然科学」のなかで、歴史と自然科学との違いは研究の対象にあるのではなく、研究の方法にあるのであり、歴史の方法が個性記述的であるのに対して、自然科学の方法は法則定立的である、と断定した。このような考え方は、当時、歴史学の方法論をめぐる展開されていた「方法論争」、乃至、論争の中心人物であったカール・ランプレヒトにちなんで「ランプレヒト論争」と呼ばれていた激しい論争において、歴史学に自然科学的方法を導入しようとしていたランプレヒトを批判する側の歴史学者たちを勇気付けた。しかし、ホワイトの問題提起を意識して振り返るとき、ヴィンデルバントの主張は、同一の対象について複数の認識の方法がありうることを示唆したものであり、歴史叙述における客観性の根拠をむしろ揺るがす性質のものであったように思われる。本研究では、この点を掘り下げることをめざしたい。

第二の課題は、虚構性と叙述性をめぐって展開され、蓄積された文学理論を批判的に摂取することである。ホワイトの問題提起も、このような文学理論について

の豊かな知見に基礎付けられている。アメリカの歴史学界のなかで、ホワイトの問題提起を批判を交えてではあるが継承していると見られるコーネル大学の歴史学教授ドミニク・ラカブラの著作『歴史と批評』、『思想史再考』などにおいて、ジャック・デリダやミハイル・バフチンらの文学理論が大きく取り上げられている事実は、この第二の課題の重要性を裏打ちするものといえよう。

この関連で特に注目されるのはソ連の共産主義体制下で不遇のうちに没したバフチンのルネッサンス研究である。そこではカーニヴァルというタームを軸として、例えばラプレーの文学とその時代とが論じられるのであるが、バフチンの研究はナタリー・ゼモン・デーヴィスやル・ロワ・ラデュリなどの歴史学者に大きな影響を与えており、歴史学の立場からの検討をゆるがせにすることは許されないであろう。